The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	日本文化における鯉
Author(s)	ボレー, カロリン
Citation	日本語・日本文化. 2004, 30, p. 61-96
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/4011
rights	本文データはCiNiiから複製したものである
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

＜研究論文＞

日本文化における鯉

ボレー・カロリン

はじめに

母国ベルギーだけではなく他の諸外国でも、日本を代表的する魚と言えば、彩り華やかな錦鯉を心に浮かべる人は少なくないであろうが、鯉自体は世界に広く分布するものであり、それに関係する習慣或いは伝統がヨーロッパ各地にも残っている。例えば、ポーランドでは、鯉料理はクリスマス・イブに食べる伝統的な料理の一つである。ポーランド人は普段、鯉をあまり食べないが、クリスマスの一週間ほど前に、ほとんどのポーランド人が生きている鯉を買い、料理するまで、多くの場合、家の浴槽の中で飼う。その時、鯉を使って来年の運勢占いも行う。ポーランド人にとっては、鯉が普通の魚ではなく、何らかの特別な力をもったものであると言って差しつかえないであろう。クリスマスに鯉を食べる習慣は他にも、チェコやドイツやハンガリーなどでも見られるものであるが、ブルガリアでは、鯉はクリスマスではなく、聖ニコラスの祝日（12月6日）に食べる魚である。それは、鯉が聖ニコラスの使いとされているからだと言われている。又は、イスラエルのユダヤ人も、安息日や過ぎ越しの祝いなどの神聖な日には、鯉を食べるようである。勿論、こういった習慣が残らず、鯉を普段に食べる国々もあるが（鯉が世界で最もよく食べられる魚であると言われている）、上述の習慣を考えれば、鯉が何らかの神聖な意味と結びついていたとも言えよう。

日本において、鯉の寺社の池で泳いでいる姿はよく見られるものであるが、あるポーランド人は日本に留学していた時に、クリスマスにどうしても鯉が食べたかったので、寺に行き、鯉を一尾捕ってきてしまったという逸話もある。これは、鯉がクリスマスになくてはならない特別な魚であることを示す話であるが、寺の鯉を日本人は決して獲らないことがその話の背景になっている。このように、両

者の鯉の扱いは確かに異なるが、鯉がもつ文化的な意味合いは元来同じものではなかったのか。つまり、鯉は不思議な力がある特別な魚であり、神の使者、あるいは神そのものとして考えられていたのではないだろうか。上記の例で言えば、前者は、鯉は神聖であり、その力を得るために食べるのであり、後者は鯉の神聖さの故に食べないとも解釈できよう。

ただし、鯉は、日本では寺院といった神聖な場所以外に、例えば鯉幟、錦鯉、鯉の洗いなど文化的な多種多様な局面で現れてくるものであり、現在の日本人にとってそのイメージが一様であるとは言えない。そこで本稿では、現存する記録や伝承をできる限り収集し、鯉に関する習慣を広範囲に考察することによって、日本文化の中での鯉の位置づけというものを明らかにしていきたい。

その際、鯉に関する数多い習慣を本稿では「鯉を食べる習慣」、「鯉を鑑賞する習慣」、「鯉を信じる習慣」の三つに大別し、それぞれの章をたて論究する。第一の習慣は、昔から鯉が食用になっていることからでてくるものであり、第二は錦鯉のような形でも諸外国にまで知られているように、日本では古くから観賞魚として扱われてきたことによる。そして最後の第三の習慣は、現在多くの日本人に忘れられ、今は形として残っているだけであるが、過去の伝説・信仰を扱うことによって明らかになるものである。

日本の民俗学では、鯉という魚は、キツネ・タヌキ・ヘビ・ネコなどの動物よりも研究が行われていない生き物であり、その文化的位置づけがあまり明確ではないように思われるが、伝説や昔話などのような「信じる習慣」だけではなく、「観賞する習慣」や「食べる習慣」（昔の日本人はキツネも食べていたようである）が今も残っていること自体、鯉が何らかの特別な意味をもつことを示唆している。

本稿では、こういった鯉に関する習慣を考察するための前提として、先ず第 1 章で、鯉という魚の一般的な事項を扱う。鯉の原産地と鯉の名について、そして鯉の性格と特徴がどのように文献上描写されているかという点に言及する。勿論、鯉の品種も紹介するが、鯉の鱗についても多くの記述があるので、鱗に関することにも触れる。1 章の終わりには、鯉釣りに適している方法を説明する。普通の釣り方だけではなく、過去の文献にしばしば描かれている鯉抱きという釣り方も紹介する。

第2章では、日本で見られる、鯉を食べる習慣について述べる。鯉の味や鯉の飼育を説明し、日本や中国やヨーロッパでの、様々な料理法に言及する。また、鯉は薬効のあるものとして食用された点に触れる。最後に鯉は普段の日よりも特別な日に食べる魚であるということを、諸例を挙げながら明らかにした上で、鯉の庖丁式という儀式をその代表的な例として、特に取り上げる。

第3章では、観賞魚としての鯉を考察する。『日本書紀』における鯉が観賞魚として出てくる記録に言及したのち、現在、世界中で観賞鯉としてよく知られている錦鯉について解説する。他に、観賞魚の金魚と錦鯉との関係にも触れる。

第4章は、鯉にまつわる話から共通のパターンをもつ13種類の話（鯉が竜に変身する話・鯉が女に変身する話・鯉が僧に変身する話・足のある鯉の話・人が鯉に生まれ変わる話・仙人が鯉に乗る話・鯉が夢に出てくる話・鯉が闘う話・片目の鯉の話・天が鯉を贈る話・鯉が絵から飛び跳ねる話・神使いとしての鯉の話・畏怖される鯉の話）について、それぞれ考察し、鯉の象徴性について明らかにする。

1. 鯉という魚

1.1　鯉の原産地

現在では、鯉という魚は日本だけではなく、北半球では寒冷地を除くヨーロッパのほぼ全土、北アメリカ、東南アジア、南半球ではオーストラリアやニュージーランドでも生息している魚であるが、鯉の原産地は、アジアの温帯（中国のあたり）及び黒海・カスピ海沿岸の中央アジア、あるいはヨーロッパのドナウ川とチサ川ではないかと一般的には言われている。鯉は、環境への適応力がかなり高く、原産地から世界中に広く自然分布するようになったと考えられる。さらに、鯉が古くから人の手で飼育され、養殖されていたという事実も鯉の普及を早めたと言われる。

鯉はいつ日本へ入ってきたかは明確に知られていないが、縄文時代の遺跡より鯉の骨の出土が確認されていることから、かなり前から日本にも生息していたのは確かであり[1]、その最古の記録は『風土記』（713年）にみることが出来る。『常陸国風土記』[2]には、鹿島神宮の近くにある沼には、鮒と鯉が多いと記録され、また同じ常陸国の神陰性栖村の神池（こうのいけ）にも鯉が多かったと言われる。『出雲国風土

記』[3] にも「鯉石嶋（こひいしじま）」の記録があるが、それはどこの島を示しているのは不明である[4]。

1.2 鯉の名

英語では、鯉は carp と呼ぶ。それはラテン語の学名に由来する呼び方で、鯉が紀元前3世紀ごろ初めて人手によって地中海のキプロス島を経てギリシャに移植された故事に基づいた名前であると言われている（キプロス島、cyprinus、carp）[5]。

一方、日本語ではコイという名はいったいどうして付けられたのであろうか。実際、その由来はよく知られていないが、幾つか興味深い説があるようである。

最も一般的な説は、『日本書紀』の「景行天皇」についての話に基づいた説である。その話では、景行天皇が池に鯉を放し、絶世の美女の関心を引きつけたとされ、そこから、この魚を“コヒ（恋）”と呼ぶようになったという。

文献上では、コイを意味する言葉が数多く出てくる。『倭名類聚抄』（938年）には、「鯉」の発音については、「上音里和名古比」[6] というようにに説明されている。

鯉の異名については、『本朝食鑑』、『壒嚢鈔』（1446年）、『物類称呼』（1775年）[7] に見ることが出来る。『本草綱目啓蒙』（1803年）にも、和名としては“コヒ”か“マゴヒ”があるが、稚竜・季長史・赤渾公などのような様々な当て字も見られる。

1.3 鯉の性格と特徴

鯉の形態上の特徴は、咽頭骨に臼状の歯を持つことと[8]、口辺に2対の長短のひげを持つことなどである。鯉の唇がかなり大きく、鱗がはっきりしているのも明らかな特徴である。鯉の鰭にもそういう特性があり、それぞれの名も違うようである。

鯉の大きさと言えば、鯉の年齢と品種によって異なるが、一般的には60-70センチからの鯉が大鯉とされる。『和漢三才図会』（1712年）には、年齢が高ければ高いほど大きいと言われ、三尺[9] に近いものも稀におり、三尺を越えるものは、竜に変身出来る程の力を持っていると記述されている[10]。

鯉は魚の中で最も長生きすると言われる。寿命は20～30年位などと言われるが、時には100歳を越える鯉の記録もある。自然の状態では、通常60年程度生き

ることが出来るようであり、従って、鯉の寿命は人間と同じ位だと言っても良い。日本で記録に残っている鯉の最長寿は岐阜県の越原家の池で飼われていた「花子」という鯉で、214歳であったと言われるが、この点については第3章に詳しく述べる[11]。

淡水魚は海水魚にくらべて抵抗力が強いが、鯉は特にそうである。非常に力強い魚であり、水の外に出てもなかなか死なない。さらに、鯉がよく飛び跳ねるということも昔から言われている。鯉は確かに力強く尾で水を打ち、雄然と泳ぎ、時に1度、2度と続けて殆ど水面に全身が出るほどの勢いで飛ぶようである[12]。『本草綱目啓蒙』には、鯉の別名として「飛魚」という名が出てくる[13]。中国の伝説によると、鯉が滝まで登れ、竜になることもあるとするが、この点については第4章で説明する。

また、鯉は、力と勇気を持っている魚とされていたので、日本では武士の象徴としても使われていたようである[14]。それは勇気だけではなく、威厳、運命の甘受（俎の鯉）、そして忍耐力をも表していた[15]。

鯉は身体的に丈夫な魚であるが、それだけではなく、他の魚と比べて賢い魚である。賢いので、捕まえ難いとも言われている。『孔雀楼筆記』には梁という罠についての話が書かれている。この話によると、人間も川に落ちれば、この梁を避けることが出来ず死んでしまうが、それにもかかわらず鯉だけは梁を飛び越え、梁簀に落ちないという[16]。

1.4　鯉の品種

鯉はコイ目（Cyprinidae）の代表種であり、中にも多くの種類があるが、一般的には色彩・鱗によって分けることが出来る。

黒い鯉以外の色彩の鯉は、色鯉と言う。色鯉はそれぞれの色によって名が付けられているが、赤色のものは緋鯉と呼ばれ、昔から他の鯉より珍重されている[17]。美しい色彩で最もよく知られている鯉は、錦鯉であるが、この人工的に作り出された種については、後に詳しく説明する。

鱗があるかどうかということによっても、鯉を品種に分けることが出来る。日本の鯉であれば、殆どの種は鱗がはっきりしているが、1905年にドイツから輸入

されたドイツ鯉の特徴は、鱗が殆どないことである。ドイツ鯉はその品種としては、あまり人気がなかったが、錦鯉の中にはドイツ鯉型の鱗をもつドイツオウゴン（独逸黄金）などと呼ばれる品種もある[18]。

以上の品種のほかには、日本でもう1つの区分がある。それは野生の鯉と養殖の鯉の別である。野生の鯉をマゴイ（真鯉）、養殖品種をヤマト（大和）と呼び区別するようである。野生品種は体高が低く、体に厚みがあり、体色もやや黄色光沢が強い。これに対し、養殖鯉は放流後に成長したものでも体高が高く、体の厚みが薄い。色も銀白色に近いと言われている。

近世の日本では、動物分類学はまだ発達していなかったため、鯉は、鮒とも金魚とも同類と考えられることがあった[19]。『本朝食鑑』には、金魚には鯉の種類と鮒の種類があるというように書かれている[20]。『貞丈雑記』、『本草綱目啓蒙』でも鯉と金魚の品種を混同している[21]。

1.5 鯉の鱗

一般的な鯉は側線上の有孔鱗数が32～39枚位であるが、36枚の個体が多く見られると言われている。このことは多くの歴史文献に散見できる。

『本草綱目』（1578年）には、鯉の鱗が36枚あるから、鯉は陰の魚だとされている[22]。それは、鯉が滝を上り、竜門を通り、竜に変身するという中国の伝説に基づくと『本朝食鑑』に説明されている。鯉の鱗が36枚、或いは「六六」（6かける6は36）あると言われている。「六六」というのは、中国哲学の陰陽によると、至陰の数である。それに対し、竜に九九の重陽の数があると伝えられている。となれば、陰が極まり、陽に変わるという理屈になる[23]。このことから鯉を六六魚と呼ぶようにもなった。『本草綱目啓蒙』には「六六魚」が鯉の別名として出てくる。

1.6 鯉釣り

鯉釣りの場合、釣り場の状況によってその方法は様々であるが、大別すれば、脈釣りと浮き釣りがあるが[24]、鯉の獲り方として、「抱き鯉」という、素手で鯉を捕える特殊な漁獲法もある。漁夫が川の中に入り、鯉を優しく腕に抱き、一瞬に

水から取り出し、川岸に投げるという方法である。昔はこの特技を見世物に使った者もあったようであるが、今はゲームとして残っている。この獲り方については、『本朝食鑑』[25] 及び『雲萍雑志』（1843年）[26] に見ることが出来る。

2. 鯉を食べる

2.1 鯉の味

2.1.1 川魚の王

中国そして日本では、鯉という淡水魚が川魚の中で上級品であり、王とされていたことは様々な文献に出てくる。

中国の『本草綱目』（1578年）では、鯉が生薬の一つとして扱われているが、食べ物としても非常に美味とされている。さらに、鯉が魚の長とされているということまで記録されている[27]。日本の『本朝食鑑』[28]（1697年）には、鯉が魚の主とされ、同じのような記述がある[29]。寺島良安『和漢三才図会』（1712年）の中にも、上記の『本草綱目』から引用し、鯉が魚の品種の中で上級品とされると記述されており[30]、『魚鑑』の鯉の項目は「鯉ハ魚の長なり」[31] という言葉から始まっている。また『本草綱目啓蒙』[32]（1803年）にも小野蘭山は鯉の別名の1つとして「魚主」を挙げる[33]。

総じて、鯉は魚の長、又は魚の主とされており、最も美味と評された魚であった。鯉は美味しい魚であるから川魚の王とされたのか、或いは川魚の王だから美味とされたのか、どちらが先かは分からないが、鯉が食べ物として珍重されていたのは確かである。

2.1.2 淀川の鯉

鯉の味に、産地によって順位を付けていたようで、それは多くの文献に見ることができる。最も美味なのは淀川の鯉、これに次いで宇治川・勢田川・琵琶湖の産である。関東では、浅草川と常州の箕輪田の鯉が最も美味とされた。この順序は、文献によって少し異なるが、淀川の鯉が最も美味ということは決まっていたようである[34]。

2.1.3 鯉の旬

鯉という川魚は季節を問わず入手しやすい魚であるが、木下謙次郎によると[35]、一番美味しいのは冬である。しかし、末広泰雄によると、鯉料理の旬は冬よりも五月だと言う。それは、五月は鯉の産卵期だからであり、五月五日の節句に日本において古くから鯉幟がたてられるのはそのためと言う[36]。

2.2 鯉の飼育

鯉を飼育した記録のなかで最古のものは、中国で紀元前470年頃に陶朱公によって著された『養魚経』であるが[37]、日本で養鯉の最も古い記録は、『日本書紀』（720年）にある。景行天皇の4年に天皇が美濃国泳宮の池で鯉を放ち、これをご覧になったと書かれている[38]。このことから、日本書紀が書かれた当時に鯉を飼う習慣がすでにあったと推測できる。この記録が日本で鯉の飼育の始まりとされている。

鯉を池で飼育するのはかなり容易であると言われている。鯉は適応力が高いことは既に述べたが、池で放すと早く繁殖する理由としては、『和漢三才図会』にはもう1つの特徴が取り上げられている。それは、鯉が共食いをしないという性格である[39]。

2.3 鯉の効能

昔の日本人は、鯉が様々な病気を治す力を持っていると考えていたようである。鯉を食べるのは漢方の一つの方法だった。

鯉の肉を食べれば、病気が治り、その上で調理の仕方によっても違う効用が出てくる。『本朝食鑑』（1697年）では、薬としての鯉はかなり詳しく説明されており、鯉の肉を食べると、小便の出がよくなり、腫物・黄疸・喘息・湿熱などのような病気が治るということが書いてある。また、鯉を鱠にして食べれば、性質は温かいので、よく冷気の病に効く。焼いて食べれば、さらに肺を平静にし、乳の出をよくし、胃腸（例えば食中毒の場合）にも良い薬である[40]。

鯉の部分によっても、薬としての効果が違う。同じく『本朝食鑑』には、鯉の効能は頭・眼・胆・鱗の部分に分かれており、それぞれの効き目について書かれ

ている。鯉の頭及び髄脳は盲目や聾に効き、胆汁は目の病気を治す。鯉の眼を冷水で飲めば、乳汁が迸出、鱗の焼いた灰は痔ろう・骨髄・吐血を治すというように、様々な治癒力が鯉に与えられていた[41]。

ただし、場合によっては、鯉を食べてはならない魚になるので、注意が必要であると種々に記録されている。例えば、『倭名類聚鈔』には妊娠している女性は鯉の頭を避ければよいという記述がある[42]。

病気を治す鯉の力を信じる習慣は昔だけではなく、今も残っているようである。胸が痛ければ、鯉の生血を飲めば良いという話は今も聞かれる。また、鯉を料理する時には、胆嚢をつぶすと苦いから、注意しなければならないとよく言われているが、ある話によると、その小さな球形の袋をお湯に入れて飲めば、体に良く、元気が出ると言う。

2.4　料理法

2.4.1　鯉料理

鯉を料理にする時には様々な方法があるが、最も重要なことは、出来るだけ生きている鯉を使うことである。鯉は川魚で、生臭さがすぐ出るので、死んだ鯉を避ける人が多い[43]。養殖の鯉を使う場合、冷水で洗えば生臭さがなくなるので、少なくとも一度は冷水で洗うべきであるとする[44]。

ここですべての鯉料理を挙げることが不可能であるが、今も残っている料理の仕方なら、鯉こく（筒切りにした鯉をみそ汁で煮込んだもの）・鯉の洗い（冷水で冷やし、縮ませた鯉の刺身のこと）・鯉の味噌漬け（味噌に漬けた鯉肉）・鯉の刺身の4つの鯉料理が日本で一番よく知られている食べ方であると言っても間違いないであろう[45]。

日本では、鯉を焼いて、食用にすることはほとんどない。かつてはそのような料理法があったと考えられているが、武士が切腹の前に焼いた鯉を食膳に供する習慣があったので、食べなくなったとも言われている。その習慣については、『女百話』に書かれている[46]。日本人が焼いた鯉を食べなくなったということは『貞丈雑記』（1843年）に記録されている[47]。現在、そういったタブーがなくなっているので、日本人は再び焼いた鯉を食べるようになったのであろう。

2.4.2 特別な時に食べる鯉

鯉が魚の主で、魚の品種の中で高級品であるといった記述は文献上数多く出てくるが、この点を逆に考えれば、鯉は普段食べられない魚だったと言っても良いであろう。又は、一般の人の前ではなく、天皇の前で調理される魚であったという記述は『徒然草』（1310-1331 年）に見ることが出来る[48]。鯉は特別な魚であるから、鯉を料理にすること自体が壮大な行為として見られていたのは確かで、特に大きい鯉を料理にする時には、大げさな振る舞いが伴っていたようである。

2.4.3 包丁式の鯉

東京都台東区東上野にある坂東報恩寺では、毎年 1 月の 12 日に「鯉の俎開き」という式典が催される[49]。その日には、大きな鯉 2 尾が報恩寺の書院で大勢の人の前で四条流の包丁人によって料理にされる。

その由来とは何であろうか[50]。報恩寺の住職によると、「俎開き」は 700 年以上も続く行事である。話は報恩寺の初代住職の性信という僧の時代まで遡る。その性信は親鸞上人の直弟子で、上人の命を受け、下総国飯沼（現在の茨城県）という所で一寺を建立し（1214 年）、報恩寺という名を付けた。善男善女に法の道を説いていた性信上人のもとに、一人の翁が訪れ、その寺に入った。そして、ある日、その老翁が性信に向かって、謝意を表し、師弟の礼は一生忘れることはないと言い、北の方角、つまり大生郷の天満宮のある飯沼の方へ消え去った。その夜には、近くの飯沼天満宮の神官が夢の告げを受けた。その夢には天神が現れ、「性信の聖は我が師である。我は聖の教えによって、永い間の苦悩を逃れ、永世の楽果を得ることができた。我が師の洪恩を謝するため、毎年御手洗の池の鯉 2 匹を贈るべし。必ずこのことを違えてはならぬ。」と告げられた。翌朝神官が目を覚めた時には、驚いたことに、寺の御手洗には 2 尾の大鯉が溌剌と泳いでいた。この伝説から、毎年飯沼天満宮が 2 尾の大鯉を報恩寺に贈るようになったというのである。

報恩寺は東京の上野に移ったが、今も毎年 1 月 11 日には水海同市の菅原天神から鯉 2 匹が同市の下総坂東報恩寺に贈られ、翌 12 日には東上野の本坊へ届けられる。その鯉が土佐烏帽子（とさえぼし）・直垂（ひたたれ）姿の料理人によって切られ、その年に選んださば

き技によって、ある「形」にされる。庖丁人が鯉を切り終わってから、参観客がその料理にした鯉を食べる。

「鯉の俎開き」という儀式は、はじめは寺の住職に行われていたが、江戸時代には日本料理の四條流の「庖丁儀式」と結び付き、プロの庖丁人によって行われるようになったと伝えられる。「庖丁式」は王朝時代の儀式で、賓客を自分の家に招いた時に、その家の主人が大事な客を歓待するために、まず自ら庖丁をとり、庖丁ぶりを見せるということに由来する。続いては、家の主人が切った材料を料理人に調理させ、再びその賓客の膳に供する。東報恩寺の「俎開き」も「庖丁式」の種の1つで、四條流の庖丁式という。

庖丁式であれば、四條流だけではなく、他の流派もあり、鯉を形づくる庖丁の儀式の素材として扱う。例えば、生間（いかま）流庖丁式[51]もある。生間流の「鯉の庖丁式」も多くの切り型がある[52]。形はそれぞれ、流派によっても違うが、儀式の由来は同じで、大事な客を迎えた時に縁起のいい魚で、めでたいものを形づくる庖丁の儀式に基づいている。

東報恩寺の「俎開き」以外でも、京都の貴船に毎年7月7日「貴船水まつり」があり、その時にも生間流の料理人によって行われる庖丁式がある。大阪府茨木市にある総持寺[53]でも、毎年4月18日に庖丁式が行われる。鯉・鯛を料理にする庖丁人は山陰流の庖丁人である。もう一つの庖丁式は千葉県にある高家（たかべ）神社で行われる。この神社は料理の祖神をまつる社で、毎年10月17日（旧神嘗祭）と11月23日（旧新嘗祭）には四條流による庖丁式が行われる。

2.5　特別な魚

鯉という魚を食用に関係する習慣から見ても、他の魚と区別されることは、今まで述べたことでも明らかであろう。味は上級品の味とされていたが、それだけではなく、鯉にはある神秘的な力があると日本人は信じていた。鯉を食べると病気が治る、又は力が出るなど、治癒力に関する記述は、その一つの証明となる。しかし、これに対し、逆の考え方もあったようである。つまり、鯉は神秘的な動物であり、食べてはならないという考え方である。

鯉の象徴的意味については第4章で詳述するつもりであるが、鯉を食べるか食

べないかは別とし、普通の魚ではなく、何か特別で神秘的な力を持った魚として見られていたことは確かであり、この魚を食べるのは、その力を得るためであった。まさに、普通の人ではなく、天皇が食べる魚であり、賓客に食べさせる魚であった。しかも、普段ではなく、特別な時（例えば祭の日）に食べる魚であった。また、鯉を調理する時には、この神秘力をもつ魚を殺すのだから、大げさの振舞や儀式が伴った。そのために、鯉を捌くプロの庖丁人までもが現れるのである。

3. 鯉を観賞する

3.1 観賞鯉の最初の記録

鯉を観賞にする風習は、食用にするとともに起こったことが考えられるが、鯉を目で見て楽しむ習慣の最初の記録は、すでに第2章の2.2「鯉の飼育」で述べたように『日本書紀』に見ることができる。そこには景行天皇が池に鯉を放ち、朝夕にご覧になり、お遊びになったということが書かれており、日本における養鯉についての最初の記録だとされている。

これは『日本書紀』成立（720年）前後には、貴族層の間で観魚を楽しむ風流が定着していたことを示すと言われることもあるが、実際にどうであったのか、それを確かめることは出来ない。勿論、当時そのような観魚の遊びがある程度定着していたとしても、地方の人たちにとっては無縁であり、貴族の間に限られていたであろう。また、同じことを前提とすれば、平安時代（794年～1185年）において貴族の邸宅の建築様式として流行した寝殿造りでは、泉池を配した林泉庭園が造られ、この池で、鯉が飼育されていたとも考えられるが、文献上証明は出来ない。

3.2 錦鯉

現在、観賞を目的としての鯉と言えば「錦鯉」がよく知られている。錦鯉というのは、真鯉の一変種の色彩、斑紋の美しい変わり鯉のことを言う。今世界的に有名であるが、錦鯉というカラフルな鯉は日本人の手によって作り出された純日本的な魚である。

3.2.1　錦鯉の沿革

錦鯉の出現については、正確な文献が残されていないため不明であるが、一般に新潟県の中央部にある小千谷市という所が発祥地として考えられている。越後では、愛玩用と食用の二つの目的で鯉を飼育する習慣があったようである。前者は山古志・魚沼の20村郷（東山、太田、竹沢、種苧原、釜ヶ島5か村の総称である）を中心として盛んになった。町村合併の結果、現在はそのほとんどが小千谷市に属している[54]。

この地域は山地であり、耕地も宅地もすべて傾斜地に造られている。水田は大小不同に階段的に区画され、灌漑用水も不足することも多かったため、彼方此方に様々な形の溜池が作られるようになった。さらに、この地区が海から遠く、冬に深雪のため交通が途絶することもあったので、海の魚が手に入れることが難しかった。そこで、川魚の鯉をその溜池を利用し、飼育し始めたとされる。

鯉を溜池に飼い始めたのは天明（1781-1788 年）の頃だと伝えられている。その時には、全国的に大旱魃があった。干天が打ち続いたことから、村々の水が涸れた。村人は溜池の鯉を集め、東山村塩谷（現小千谷市）の千竜池に移し、わずかに絶滅を免れたという言い伝えがある[55]。

飼育していた鯉は勿論真鯉であったが、文化・文政のころ（1804-1829 年）にはその真鯉から突然変異によって、緋鯉、浅黄、鼈甲などの変わり鯉が偶然に生まれた。このようにして錦鯉を飼育する習慣が始まったとされている。天保年間（1830 年ごろ）までにその習慣が盛んになり、藩内・藩外にも伝えられたと言われる[56]。

その時から、改良に改良を重ね現在の豪華絢爛たる姿が作り上げられて来た。更に、二十世紀の半ばぐらいから錦鯉が日本を出て、外国にも輸出ようになった。

3.2.2　錦鯉の名称の由来

1830年ごろから、明治時代を通じ、大正の中頃まで、錦鯉は「越後の模様鯉」、「模様もの」、または「越後の変わり鯉」として知られていた。大正3年（1914年）3 月に上野公園で開かれた大正博覧会では、錦鯉が「越後の模様鯉」として紹介された。その時から、東京を中心とし、広く日本各地に知られるようになり、錦

鯉の販路もこれで開かれたが、商品名として「越後の変わり鯉」と言う名称が長すぎると判断され、「色鯉」という新しい名前が付けられた。しかし、「色鯉」は「色恋」と同じ発音のため、昭和10年（1935年）に当寺東京帝国大学教授田中茂穂が初めて「flower carp」・「花鯉」という名を用いた。「花鯉」の使用は昭和20年（1945年）まで続いたが、一般化しなかった。昭和30年（1955年）までは「色鯉」が一番よく利用された名称であった。「錦鯉」は、その次につけられたもので、それが定着し、その名は外国でも使われるようになったのである。戦後、輸出復興を目指し、「fancy carp」という名前で海外に紹介しようとしたが、結局名前として定着せず、そのまま外国でも「nishikigoi」を呼ぶようになった[57]。

3.2.3 錦鯉の品種

錦鯉の種類が大変多く、細分化すると80種以上にも達すると言われておる。その様々な種類は、一般的には、色彩や斑紋などにより命名されている。詳しく言えば、黒色のメラノフォア、黄色のキサントフォア、赤色のエリスロフォア及び白色のグアノフォアの4種の色素細胞の組み合わせによって作らせたもので、これを系統的に考えると、真鯉と緋鯉を二大先祖として、改良によって、様々な種類が誕生したのである。

ここで全て述べることはできないが、緋鯉系と真鯉系に分け、主なもの名前だけを例挙したいと思う[58]。

① 緋鯉系

緋鯉、ベニ鯉、白無地、紅白（こうはく）、三色（さんしょく・さんけ）（従来のもの）、大正三色、別光（鼈甲とも書く）（白、赤）、茶鯉

② 真鯉系

浅黄（あさぎ）、秋翠（しゅうすい）、写物（白、緋、黄）、銀棒（ぎんぼう）、金棒（きんぼう）、鰓銀、松葉鯉（まつばごい）、黄金（おうごん）、昭和三色、変わり鯉、鳥鯉、金兜（きんかぶと）、銀兜（ぎんかぶと）、黄鯉、黄松鯉、錦水（きんすい）、孔雀黄金（くじゃくおうごん）

3.2.4　花子

鯉の寿命は、20～30年位などと言われるが、中には100歳を越える鯉の記録もある。つまり、鯉の寿命は大体人間と同じじぐらいだと言ってもいいであろう。しかし、時々例外も出てくるらしい。

天野政之『趣味と実益の錦鯉』[59] の中では、本が書かれた当時に214歳だった緋鯉が紹介されている。1965年に岐阜県加茂郡東白川村大字越原の越原家で、138歳から214歳までの鯉が六尾発見されたといわれる。天野政之は、その六尾を飼っていた越原公明に年齢の調査を依頼された。調査は前述の大学で理学博士広正義教授によって行われた。鯉の年齢を調べるために、越原氏が各鯉から鱗を一枚ずつ取った。樹木と同じように、年輪ができ、それを見れば魚の年齢は大まかに推定出来るからである。鯉は春から秋にかけて成長し、越冬期は、餌を食べなくなり、冬眠するので、成長が止まる。そのようにして年輪ができる。従って、その年輪を数えると年齢が分かるのである。

3.3　特別な魚

普通の魚であれば観賞されることはほとんどないので、観賞用であること自体、鯉が特別な魚として扱われていることを示すものである。また、鯉を観賞する習慣は昔から日本にあったと考えられるが、それだけではなく、観賞のみを目的とする錦鯉まで作り出された。まさこのことこそが、鯉を特別な魚と考える証明ともなろう。

今錦鯉は、その色彩や形などの美しさを観賞するために飼育されるのであろうが、以前は異なっていたと思われる。飼育の最初の記録は、鯉が天皇の手によって飼われていたというものであるが、どうして天皇が他の魚よりも鯉を選び、池に入れたのであろうか。第2章にも述べたように、鯉は川魚の王とされており、天皇もこの理由で鯉を飼い始めた可能性がある。つまり、天皇は神秘の力をもつ鯉を支配できる自らの力を誇示するために、鯉を池で飼ったと考えられないであろうか。百獣の王ライオンを飼う尊長の話など世界的に見てもこれに類する話は多くある。

4. 鯉を信じる

4.1 竜に変身する鯉

4.1.1 滝登り

鯉にまつわる伝説と言えば、最も代表的な伝説は中国の「滝登り」である。この伝説によると、中国・黄河の上流に滝があり、他のどんな魚も遡れなかったが、鯉だけが遡ることが出来、その鯉は竜門を通って、竜に変身することが出来たという話である。

『本朝食鑑』（1697年）には、鯉が魚の主とされるということは、鯉の滝登りの説に基づくというように書かれている[60]。『本草綱目啓蒙』には、鯉の別名として「稱龍」と「龍公子」の記録がある[61]。

『一宵話』（1810）にも、鯉の滝登りという古話は子供話として残っていると書かれている。鯉が滝を登るのは竜門の滝だけではなく、山中の滝も登ると言われるが、実際に見た人はいない。しかし、田舎の人はこれを信じ、奔流する川から捕った鯉は天然痘の薬として使うことも記録されている[62]。

4.1.2 鯉幟

日本で端午の節句の象徴としては鯉幟が一般的に知られている。鯉幟の鯉は、滝登りの鯉で、立身出世の象徴とされている。鯉幟の習慣はいつから始まったのかははっきり知られていないが、歴史はそれほど古いものではない。江戸時代に菖蒲の節句[63]として武家階級では旗指物や幟や吹流しを玄関前に並べ立てた習慣から起こったものだと一般的に考えられている。江戸中期以降、町人階級も戸外に鯉幟を立てるようになった。昭和23年（1948年）から5月5日が子供の日となり、毎年その時期に男の子が育っている家で、子供の成長を願う、元気な鯉の滝登りを表している鯉幟が立てられている[64]。

4.1.3 鯉山

鯉山というのは、鯉の滝登りをイメージした山で[65]、京都の祇園祭[66]に出てくる山鉾の一つの山として知られている。山鉾は32基もあるが、鯉山が八坂神社の祭神であるスサノオノミコトを祀る祇園祭では、唯一の山である。鯉山が毎年出

るようになったのは14世紀の後半からであると思われるから、かなり古い。狂言の『籤罪人』[67]にも山の一つとして挙げられている[68]。

鯉山は京都の祇園祭だけではなく、滋賀県大津市の大津祭り（10月）にも鯉山があるようである。竜門滝山と言うが、祇園祭の鯉山と同じで、鯉が竜門の滝を登り、竜に変身する瞬間を表している。

4.1.4　鯉石

鯉石、又は鯉魚石というのは、鯉形石で、これも鯉の滝登りを表している。ここで鯉魚石の1つとしては金閣寺の鯉魚石を挙げる。金閣寺には、2.3メートルの高さの滝があり、そこに滝を登ろうとしている鯉の姿を石で表している鯉魚石は今もみることができる[69]。

4.2　女に変身する鯉

昔話の代表的な話としてはここで「鯉女房」という話を取り上げたい。「鯉女房」は「魚女房」の異類婚姻譚の一つである。ある男が鯉を助け、その鯉が恩返しとして美しい女の姿をなり、男のところへ行き、その男の妻になる。しかし、嫁の作る汁が非常に美味なので、ある日、その男が台所を覗きに行き、偶然嫁の本当の姿を見てしまう。嫁は見られたことに気づき、恩返しに来たことと話し、去っていくというのが、基本的なパターンである[70]。柳田國男によると、鯉女房の話の発端は「喰はず女房」の型にあった。ある独身の男が飯を食べない女房ならほしいと口癖のように言っていると、そこへ鯉が女に化け嫁に来る。そのパターンが少しずつ、地方によって、時間がたつにつれて変化してきたという[71]。

さらに、女房の正体は鯉であると同時に竜宮から来たものであるという話もある。この場合には、鯉女房が竜王の太子、または王女であり、鯉は竜と関係があるとされている[72]。竜は空想的な動物であるので、竜を描写する時に、他の実在する動物と共通する特徴を挙げるが、竜の鱗は鯉の鱗に似ていると言われることから、鯉と竜の関係を見ることができる[73]。

鯉が女に変身する代表的な例として、『西鶴諸国ばなし』（1685年）に「鯉の散らし紋」という話もある。内助という漁夫が古い池の近くにある堤の上で家を建

て、妻子も持たず、一人に住んでいたというように始まる。ある日に内助は、はっきり目印が付いている鯉を獲り、生簀で養い始めた。ある時、内助が同じ村から女房をもらった。内助が舟で漁に行った間に、美しい女が女房の所に行き、「私の腹に内助の子がいるから、早く実家へ帰りなさい。そうしないと大波で家を池に沈めてしまう。」と言い去って行った。内助はその次の夜に再び舟で出た時、突然池から大鯉が舟に飛び乗り、口から子の形のものを吐き出し、去って行った。内助は生簀を見ると、飼っていた鯉はいなくなっていたという[74]。

4.3 僧に変身する鯉

魚が僧に変身し、人間のところに行き、何かのお願いをするという種類の話がある。その中の一つは、鯉が僧の形を取り、ある漁夫の家を訪ねる話である。その漁夫は、川で釣りに行こうと思っているが、行く前の晩に、僧が訪ねて来て、釣りに行いった時に小魚を捕まえないようにお願いをする。漁夫は僧に餅を食べさせ、帰らせる。次の日、漁夫は魚がまったく捕まえられなく、あきらめようとしている時に、突然大鯉を発見し、捕える。捕まった鯉を切れば、その腹から僧に食べさせた餅が出てくるという話である。

この話も地方によって少し違う。例えば岐阜県には、大きい鯉の中から赤飯が出て来たという話がある[75]。又、愛知県では、鯉の腹を切り開くと中からえんどうが出てきたという[76]。柳田國男によって記録されたものにも翁に食べさせたボロン餅が死んだ鯉から出てくるという伝説が見える[77]。

4.4 人が生まれ変わった鯉

もう一つの鯉にまつわる信仰がある。それは、亡くなった人が鯉に生まれ変わるという信仰である。そういう人の生まれ変わった鯉が死ねばお寺で葬り供養する習慣も日本のあちらこちらにあったようである。さらに、鯉を葬ったところでは塚を建てることもあった。

代表的な例としては、ここで大阪の大長寺で残っている鯉塚を挙げる。話によると、1668年に網島の漁夫が淀川で大きな鯉を捕獲した。その鯉の鱗に巴の紋がついているのが珍しいので、水辺で見世物にした。日を経て鯉が死んで、漁夫が

大長寺に葬った。その夜、大長寺の住職の夢に巴紋の甲冑を付けた武士が現れ、自分は大坂夏の陣（1615年）で討ち死にした者であるが、いまだに成仏出来ない、と嘆くので住職は法名を与え弔ってやった。その墓が鯉塚である[78]。

4.5　仙人が乗る鯉

もうひとつの鯉にまつわる話は、仙人が鯉に乗る話である。最も良く知られている伝説は琴高の話である。琴高は周代（1100-256年）の趙の人であったが、伝説によると、琴高が200年以上様々な所を遊歴した後、仙術が優れ、よく赤い鯉に乗り、天に昇ったという[79]。子英という仙人もある日に池で飼っていた赤い鯉に乗り、大雨の中を空高く昇っていた。その時から、子英が毎年、家族と一緒に食事をしに飛来すると言い伝えられる。このことは70年も続いたそうである[80]。

鯉が風雨に乗じて天に昇る、仙人が鯉に乗り、跳ぶというパターンの話は、琴高と子英に限らない。中国では、他の仙人が鯉と共に描かれる絵もよくみえるから、鯉が仙人の乗り物として考えられていたと言っても良い。日本でも、同じようなパターンが多くある。大阪の椋橋神社にまつわる伝説によると、素戔嗚尊が高天が原より今の神社がある所まで降りて来た時には、鯉に乗っていたと伝えられている[81]。

4.6　夢で見る鯉

日本では、夢で鯉を見るという話もある。最有名なのは『雨月物語』の「夢応の鯉魚」という話である。10世紀に三井寺（滋賀県大津市）という所には興義という坊さんがいて、泳ぐ魚の絵を描くの好きで、漁夫が獲った魚を買い、また琵琶湖に放し、その魚の喜んで泳ぐ姿をよく絵にしたと伝われる。

ある年には、興義が病気になった。寝付いてから七日目に、息が絶えてしまった。しかし、胸のところだけがまだ温かかく、三日後に、突然興義が、眠りから目覚めた時のように、目をあけた。興義が集まっていた弟子たちに向かい、次の言葉を言った。「すぐに平の助殿のところに行き、こう伝えてほしい。今助殿は酒盛りを開き、鯉のなますを作らせているようであるが、しばらく宴会を中止し、寺においで下さい。」弟子は平の助殿の所に行き、興義が言った通りに宴会がある

ことを知り吃驚し、伝言した。

助殿は三井寺に急ぎ、そこで興義が見た夢を聞いた。興義が琵琶湖に入り、大きい鯉に乗った水の神様と会い、金色の服をもらった。その服を着ると自分が金色の鯉になった。それで、一週間ぐらい他の魚と一緒に泳いだが、結局は漁夫に獲られてしまい、庖丁人のまな板のところまで連れてこられたという。その庖丁人は助殿の料理人であり、宴会で集まっていた客にその鯉を切り、膾にしようとした。それで、庖丁人が鯉を切った時に、興義が目を覚めたという話である[82]。

4.7 戦う鯉

12世紀の前半に書かれた『今昔物語集』には、鯉が鰐と戦う話が記録されている。鰐が海から勢田川を上がり、琵琶湖の鯉と心見の瀬で戦い、鯉に負け、勢田川を下がり、石になった。鯉は勝ってから、琵琶湖の北の方にある竹生島まで帰ったと云う。今もその竹夫島に居るとも伝えられている。現在、戦場となった心見の瀬には佐久奈度（さくなど）神社があり、竹生島には都久夫須麻（つくぶすま）神社がある。この二つの神社も「近江鯉与鰐戦語」（琵琶湖の鯉が鰐と戦うこと）という伝説に関係していると思われる[83]。『太平廣紀』にも、似たような話が出てくる。ここでは、鯉が鰐とではなく、蛇と戦うが、鯉が負けることになる[84]。

鯉が人と戦う話もある。そういう話は鯉つかみの話という。1つは歌舞伎の場面で今も見ることが出来る。主人公（鬼若丸）が鯉の精と水中で格闘するシーンである。歌舞伎で「鯉つかみ」は十九世紀の前半から演じられてきたと言われるが、鯉つかみの話はそれよりも古いと考えられている[85]。

4.8 目・鱗を取られた鯉

長野県の澱城村にある社の池には、片目の鯉が泳いでいる話がある。伝説によると、それは昔、村に眼病が流行した時に、社の神様が村民の願を聞き入れ、池の鯉の目を1つずつ村民に与えたからである[86]。柳田國男も似たような話を記録している。それは、琵琶湖の近くにある草野川の流には一方に鱗のない鯉が住んでいるという話である[87]。

このような話は魚を放し飼いにする習慣をもとにし出来た話であると、柳田は

述べる。日本には、昔から祭日に魚を神に供える習慣があった。そういう時には、魚を二尾捕り、その中から一尾の魚を神饌にし、もう一尾は、印をつけるため片鱗を取り、再び池中に放す。その印をつけた魚は翌年の神饌になるので、放し飼いするという。片鱗も片身も片目も、皆同じ習慣に基づき、次の年の分を決める印である[88]。

4.9　天から与えられる鯉

天が人間に鯉を与える話もある。その時の鯉は、善行の褒美として考えても良いと思われる。『二十四孝』にはそのような話がみえる。ある夫婦は、年をとった母の看病をするのに、近くに川がないので、毎日遠くまで魚を獲りに行かなければならなかったが、ある日、家のすぐ前に大きな池が出現する。そこには鯉がおり、毎朝それを獲り、母に食べさせたという[89]。

しかし、逆に罰を与える鯉の話もある。『日本靈異記』には、犬養宿禰眞老の横死の話が描写されている。犬養宿禰眞老という人は大金持ちなのに、乞食が嫌いで、物貰いをする人に絶対金をあげなかった。ある日、門の前に一人の沙彌が立って、乞食をしていた。眞老は何も与えず、むしろ「本当に僧か」と言いながら袈裟を奪い、僧を追い出した。その夜、眞老が家で鯉を煮凝りにしてから寝た。翌日その鯉を食べようとし、口に入れ、酒を飲もうとした時、突然口から黒い血を吐き、そのまま死んだという話である[90]。

4.10　神使を務める鯉

鯉が神の使いであるという信仰も昔から日本にある。鯉が神使となっている神社・寺が彼方此方に残っているようであるであるから、ここで鯉の伝説が結びついている神社・寺について述べる。

大阪には、椋橋（くらはし）神社がある[91]。その神社の別名は鯉神社であると言われている。それは、この神社には鯉の墓（鯉塚）があり、その鯉塚にまつわる伝説が2つもあるからである。1つは、遠き神代の時に、素戔嗚之尊が高天が原から鯉に乗り、当社に降臨したという。この鯉は力が尽き死んでしまい、それを埋めたところが、神社にある鯉塚だという。一方、もう1つの里人伝説によると、昔、僧の行基[92]

が神社のあたりに留まり、川に板橋をかけ、村人の便に供しようとしたが、流れが速く、なかなかうまくいかなかった。そこで、社の神に祈ったところどこからともなく数多くの鯉が集まり並び、魚橋を作ってくれたので、無事、橋の工事を終えることが出来た。その時から、行基は村人に鯉を獲ったり食べたりすることを禁じたと伝えられる。この伝説から、昔は周辺地域では鯉を食べなかったそうである。偶然捕えた鯉は境内の鯉池に放し、又は、死んだ鯉は鯉塚に埋めたと言われる[93]。

愛知県知立町には、昔の東海道宿場の1つとして池鯉鮒という駅があったようである。池鯉鮒という名は、大明神のやしろがあったことに基づいた名である。そこには池があるだけではなく、大明神の使者は鯉と鮒とされていたそうである[94]。

栃木県小山市の高椅神社でも鯉が神の使いとして祀られる。1029年に社域に井戸を掘っていた時には、大きい鯉が出現したので、「鯉の明神様」と呼ばれるようになったと言われている。当時は鯉を食べること、及び鯉絵のついた器物などの使用まで禁じられたようである。

4.11 畏怖される鯉

鯉は多くの話には、池の主とされるから、鯉にある神秘的な力が与えられている。従って、その鯉が現れたら魚が釣れない、又は魚を獲る漁夫が死ぬ、などのような話も出てくる。場合によっては、鯉が妖怪・怪異に近い存在として認識されていたようである。

京都にある賀茂の蟻が池では、昔よく人が溺死するということは、『孔雀楼筆紀』に述べられている。また、雨を願い祈れば必ず雨が降ったとのことで、村の人々は竜が住んでいると信じていたそうである。また次のような話もある。その昔ある人が二人の友達と一緒に池へ釣りに行き、大蛇のようなものが池から出たので、皆逃げ帰ったが、その人は大熱が出、翌晩死んでしまった。一緒に行った人は数日後に回復した。このことがあったにもかかわらず、又男達（おとこだて）が出てきて友達と一緒に釣りに行くと村人に知らせた。しかし、午後2時過ぎのころ、突然池の水面に波が起ると、皆逃げて行った。その男だけは逃げず、潅木の茂みの中で

隠れ、密かに池を見ていた。その時に池から現れてきたのは、竜ではなく、馬頭ぐらいの大きい頭のある大鯉であった[95]。

また、新潟県に次のような話も残っている。池の主の鯉が三太郎と言う男の釣り針にかかり、右の目を傷つけ、怒り大暴風雨を起こし、三太郎を殺したという[96]。長野県の北佐久郡には、用水池に鯉の主がいると言い伝えられているが、500-600 年前には、ある百姓がその主の鯉を捕え、尾を切り、池に捨てた。間もなく、その百姓の家には病気が襲い、皆死んだと言う[97]。秋田県平鹿郡山内村には、黒沼があり、その沼の浮島に住んでいる主も大鯉であると言われている。この鯉を見ると1年のうちに死ぬということも伝えられていたようである[98]。

以上見てきたように、鯉が池の主で、神秘的な力を持っている故に、殺してはいけないものである。ただし、人間がその鯉を殺してしまう話もある。その場合は、鯉が祟る恐れがあるので、殺した鯉の霊を慰めるために、鯉を供養する習慣も日本で生まれたようである。そこで、次に祟る鯉の話を幾つか挙げる。

代表的な話は、東京都台東区にある龍宝寺とその境内にある鯉塚にまつわる話である。1854 年3月に、不忍池という池が浚渫された。これに驚き、浅草新堀川へ逃げ下ったようで、4月3日には新堀川で長さ三尺八寸余の大鯉一尾が泳いでいたそうである。この鯉が流れ寄るのを見ていた人々は、鯉を川から獲った。その中の一人の男は、鋸を持って来て、鋸引きなど戯れてから、鯉を龍宝寺の池に入れたが、翌日4日にこの鯉が死んだ。すると、その男も急に傷寒（チフス）になり、死んだので、鯉の祟りのせいであると人々が言い始めた。そこで、この鯉を同寺の境内に埋め、鯉の図を彫った碑を建て、供養するようになったと言う。その時から、龍宝寺の別名として「鯉寺」も呼ぶようになった[99]。

似たような話は、京都市内にある浄禅寺と恋塚寺の2つの寺と結び付いた話である。両方とも加茂川の近くにあるが、浄禅寺の方は上鳥羽岩ノ本町にあり、恋塚寺は下鳥羽城ノ越町に位置している。話では大池に大鯉が住み、人を取り、食べていたので、里人はこの鯉を殺し、埋めた所に鯉塚を建てたと言う。問題は、現在、「鯉」塚がなく、「恋」塚が2つもあることである。1つの「こい塚」は浄禅寺であるが、もう1つは恋塚寺にある。浄禅寺にある恋塚は大鯉が埋められた墓とされるが、『京都民俗志』によると、1831 年の京都の地図には、下鳥羽に五

輪塔が描かれ、「鯉塚は昔此処に大池あり、大鯉住みて人を取食ふ。里人これを殺してここに埋む、恋塚とは異也。」[100] と記述されている。そうなると、恋塚寺にある恋塚がその話に出てくる鯉塚である。『北窓瑣談』（1829）には、伏見小倉の湖の神霊とする鯉の話が記録されている。この話によると、漁夫はこの鯉を鳥羽殿と呼んでいたらしい。人を食べることはしなかったようであるが、鳥羽殿が出る時には網を下しても何も釣れなかったと書かれている[101]。

4.12 特別な魚

鯉にまつわる伝説・信仰を考えると、鯉が普通の魚ではなく、何か特別な意味を持っている魚であるのは明らかであろう。

明示的なことは、鯉には特別な力を与えられていたということである。鯉が空を飛ぶ力を持っている故に、中国の仙人や日本の神々によって乗り物として使われる。又は、鯉に変身する力が与えられていた。鯉が滝を登り、竜に変身する。恩返しとして、女になり、人間と結婚する。鯉が僧の姿をとり、人間の世界に入る話もある。後には、鯉が雨を降らせるだけでなく、人に病気を与え、人を殺す、恐ろしい能力もあると信じられていたようである。

また、多くの話で鯉が川・池の主とされるのも顕著なパターンである。どうして他の魚ではなく、鯉が池の主とされるケースが多いか。それは鯉が神秘的な魚として考えられていたからであろう。

さらに、鯉が神の使い・神からの贈り物・神の乗り物などのような、神の非常に近い存在とされていたのも確かである。他文化を見ても、特定の生き物と共に出てくる神がいる。（例えば、ギ神のポセイドンは馬と、ヘラは孔雀と、パラスアテナは梟と一緒に描かれる場合が多い。）それは、動物を神と信じる俗信（トーテミズム）があり、後にそういった神々が次第に人間化した結果だと言われるが、もしそうであるなら、神と結び付いている鯉も、元々神であった可能性がある。今、ここではその点を十分論ずる用意がないが、少なくとも、日本において鯉が普通の魚ではなく、特別な魚として位置づけられていたことは確かだと言えよう。

おわりに

以上、日本における鯉に関する習慣について、「食べる」、「観賞する」、「信じる」といった3つの観点から考察を行ってきたが、これによって、鯉が日本人にとって特別な意味を持っている魚であることは明らかになったと思われる。それは文献上だけでなく、今も残る鯉幟や鯉の庖丁式などの習慣によっても確かめられるのである。

食べ物としての鯉は、昔から日本人に高級品とされていた。それは、味が他の魚より優っているからだと言われる。ただし、それだけで十分に説得力のある理由だとは思えない。勿論、好き嫌いの問題もあろうが、高級品とされた理由は、美味と言うよりも、鯉が川魚の王座を占め、何らかの神秘的な力を持っていると信じられていたからではないだろうか。鯉に特別な力があることは、鯉が薬として使われていた（今も使われる）ことからはっきり知ることができる。こういった場合鯉を食べるのは、鯉が有する力を得るためである。また、鯉が特別であるということは、普段の時ではなく特別な日に、一般の人の前ではなく天皇や大事な客の前で調理されることからも、明白である。鯉を料理する前には庖丁式といった儀式も行われるほど、他とは区別される魚なのである。

観賞魚としての鯉を見ても、それが特別な魚であるということが分かる。金魚以外の他の魚にはそれを観賞する習慣がほとんどなく、それだけをとっても別格なのである。勿論、鯉を観賞する習慣が昔からあったが、それだけではなく、観賞のみを目的とする錦鯉まで作り出された。また、現在、鯉の観賞のため飼育するのは、その色彩や形などが美しいからだと思われるが、過去においてはそれが理由だったのであろうか。観賞鯉の最初の記録は、天皇が鯉を飼育していたというものであるが、当時、錦鯉のような艶やかな鯉はいなかったことを忘れてはならない。権力者である天皇が特別な力をもつ神に近い存在としての鯉を飼う、つまり、そういった鯉を支配下に置くことにより、自らの神性を誇示するという意味もあったのではないかとも考えられる。すでに述べたように百獣の王ライオンを飼う酋長の話など世界的に見てもこれに類する話は多く存在するのである。

鯉にまつわる伝説の中で、鯉が特別な力を持つ生き物として描写される背景には、鯉には特殊な能力が具わっているという信仰があったと考えられる。例えば、

鯉が竜に変身する話には、変身信仰が背景にあったからこそ、変身できる力が鯉に与えられるのである。文献上では、鯉が変身するので食べてはいけないとの記述から、そういった信仰が現実に機能していたことが分かる。また、こういった話に出てくる鯉は、変身する能力だけでなく、人を殺す力、雨を降らせる力、そして祟る力などの様々な超自然的な力を持っている、特別な魚として描かれている。話によって、鯉が池の主、或いは神に近い存在としても描写され、そういった信仰があったことを裏付ける。まさに、伝説はすべて鯉を明瞭に特別な魚として描き出すのである。

また、逆に、鯉が特別な魚であるという信仰を起点として鯉に関する習慣を追ってみると、今日の日本文化で残っている鯉を「食べる」、「観賞する」、「信じる」という習慣は簡単に説明できる。

先ず、「鯉が特別な魚である」という信仰はどういう意味でとらえればいいかということを明らかにしなければならない。第4章で既に述べたように、その鯉の特殊性は3つに分けることが出来る。1つは、鯉には、神秘的・超自然的力が与えられるという特殊性である。2つ目は、鯉が池の主であることで、3つ目の特殊性は、鯉が神の使いや神の乗り物として捉えられることにある。

鯉にはある力が与えられていたというのは、勿論現在も残っている伝説などにもよく見られるが、今もなお鯉から作られた漢方薬があり、俗信としてもその鯉の力で病気を治せる信仰は生き残っている。同じ信仰に基づいているのは、現在、鯉という魚が力あるいは勇気の象徴として使われているということである。毎年、子供の日に立てる鯉幟の鯉もこの意味で用いられている。

鯉は池の主であるから、特別な魚である。この信仰は、歌舞伎の鯉つかみに見られ、そこでは、主人公の鬼若丸が川の精である大きな鯉と戦い、つかまえようとする。「鯉抱き」か「鯉つかみ」は歌舞伎の一場としてだけではなく、夏の川遊びとしても存続している。そして、日本の様々な所で見える鯉塚の由来もこの信仰にまで遡る。死んだ池の主であった鯉を供養しないと祟ると信じられていたので、この鯉を埋め、塚を建てた。その鯉の供養の名残である。

鯉が神の使いや神の乗り物などのような神に近い存在とされる信仰の名残は、鯉を神の使いとする神社（鯉神社）、又は鯉を埋めた鯉塚などに見られる。鯉を飼

う習慣は天皇が始めたものであれば、今の錦鯉の起源もそこまで遡ることができるかもしれない。また、鯉の庖丁式は、鯉が神に近い生き物であると人々が信じていたことに由来するのではないかとも思われる。鯉が神に近い動物であるから、料理にする時には、普通の魚としては調理できない。神にふさわしい対応が必要となるのである。

鯉の信仰は古くから日本で見られるが、現在は形として残っているだけである。過去の日本人はどのように鯉を見ていたのか、その答えは推測の域をでないが、今に残る関係文献、習慣、遺物などを考え合わせると、少なくとも、鯉がある種の神を象徴するものと認識されていたことは間違いないであろう。

註

1）淡水魚研究会、2-3頁
2）常陸国は今の茨城県の大部分に当たる。
3）出雲国は今の島根県の東部に当たる。
4）『風土記』（日本古典文学大系本）、70-73頁、140-141頁
5）淡水魚研究会、2頁
6）『倭名類聚抄』19
7）『物類称呼』2の9
8）コイ科の魚にはどの種類にもこの咽喉歯があり、それがコイ科の魚の目印となる。
9）1尺は10寸。かね尺と鯨尺とがあり、かね尺の1尺は約30.3 cm、鯨尺ではかね尺の1.25倍で約37.9 cm。
10）『和漢三才図会』48の1
11）天野政之、57-86頁
12）黒木健夫（1972）、26頁
13）『重訂本草綱目啓蒙』40の1
14）黒木健夫（1972）、28頁
15）『世界シンボル辞典』
16）『孔雀楼筆記』（日本古典文学体系本）、320頁
17）『重訂本草綱目啓蒙』40の2
18）黒木健夫（1972）、20-21、100-101頁
19）鈴木克美、31頁

20)『本朝食鑑』7の14
21)『貞丈雑記』6（明治図書本　232頁）、『重訂本草綱目啓蒙』40の2
22)『本草綱目』44の8（商務印書館本　86頁）
23)『本朝食鑑』7の2
24) 末広泰雄、204-206頁
25)『本朝食鑑』7の1
26)『雲萍雑志』2の2
27)『本草綱目』44の8（商務印書館本：86頁）
28)『本朝食鑑』は1697年に人見必大によって書かれた。中国の『本草綱目』にならって食用・薬用になる本草について漢文体で記した書物である。
29)『本朝食鑑』7の1
30)『和漢三才図会』48の1
31)『魚鑑』下の16
32)『本草綱目啓蒙』というのは、小野蘭山が『本草綱目』をもとに日本の本草について講義したものを、その孫・門人などが整理し出版したものである。
33)『重訂本草綱目啓蒙』40の1
34)『本朝食鑑』7の1-2、『重訂本草綱目啓蒙』40の2
35) 木下謙次郎、381頁
36) 末広泰雄、203頁
37) 淡水魚研究会、3-5頁
38)『日本書紀』（日本古典文学大系本）284-285項
39)『和漢三才図会』48の1
40)『本朝食鑑』7の2
41)『本朝食鑑』7の2、3
42)『倭名類聚鈔』16
43) 末広泰雄、203頁
44) 木下謙次郎（1950）、382頁
45) 前掲同書、382-383頁
46) 篠田鉱造、156頁
47)『貞丈雑記』6飲食の部（東洋文庫本：第2巻、157頁）
48)『徒然草』（日本古典文学大系本）185頁
49) 当寺は健保2年（1214年）下総横曽根の地に（現在：茨城県水海道市）、親鸞聖人の直弟・性信が、直言宗の廃寺を改修し念仏道場としたのが始まりであると言い伝えられている。江戸時代に入る直前、その寺が焼失し、1602年に江戸へ移り、

外桜田、日本橋、浅草を経て、1810年に現在の東上野の地に落ち着いた。本堂・講堂は、関東大震災（1923年）で焼け落ち、現在のものは1935年に再建されたものである。

50）松林浄蓉（中外日報）

51）生間流は鎌倉時代に始まり、八條宮が住居した桂の御所で八條、京極宮、有栖川宮に代々従属し、今日まで有職料理と庖丁式を継承しているという。

52）黒木健夫（1972）、26-29頁

53）この寺は補陀洛山総持寺と称され、仁和2年（886年）に、藤原一問で中納言の要職にあった藤原山陰が創建した寺である。

54）黒木健夫（1972）、18-19頁

55）天野政之、30-33頁

56）黒木健夫（1975）、98-100頁

57）黒木健夫（1972）、19-20頁

58）前掲同書、47-81頁；天野政之、97-157頁

59）天野政之、57-86頁

60）『本朝食鑑』7の1

61）『重訂本草綱目啓蒙』40の1

62）『一宵話』（日本随筆大成本）430-431頁

63）菖蒲の節句は旧暦5月初めのころが、梅雨に入り、黴が生える季節であるから、菖蒲でその毒気を払っていた。その習慣は平安時代からあったようである。

64）鈴木棠三、416-417頁；新谷尚紀（朝日新聞）

65）井上頼寿、227頁

66）京都祇園社（八坂神社）の祭礼

67）祇園会に出す寸劇を決めるのに、ある町衆Aの家で数人の衆が集っているが、Aの召使Bは何事にも首を突っ込む性格。結局、Bの案の閻魔大王が罪人を責める様を寸劇として出すことになり、役決めのくじを引くと、Aが罪人、Bが閻魔大王となってしまう。練習を始めるが、Bが少しでも責めるとAが怒り、最後には、AがBを追い掛け回す、というもの。

68）『籤罪人』（日本古典文学大系本）141-151頁

69）井上頼寿、125頁

70）『日本昔話事典』92-93頁

71）柳田國男、第6巻、268-270頁

72）『日本昔話事典』92-93頁

73）Werner, E.T. Chalmers, p.208

74)『西鶴諸国ばなし』（日本古典文学全集本）121-123 頁
75) 杉原美作、5 頁
76) 大塚貢、柴田操、安浪香理、116 頁
77) 柳田國男、第 5 巻、278-281 頁
78)『摂津名所図会』104 頁
79)『本草綱目』44 の 8（商務印書館本：86 頁）
80) 花咲一男、92-95 頁
81) 椋橋総社のパンフレット
82)『雨月物語』（日本古典文学大系本）70-76 頁
83)『今昔物語集』（日本古典文学大系本）306 頁
84)『太平廣記』第 464 巻、2 頁
85)『歌舞伎事典』
86) 小泉清見（1932）、17 頁
87) 柳田國男、第 5 巻、141 頁
88) 柳田國男、第 5 巻、140-142 頁
89)『二十四孝』（日本古典文学大系本）249 頁
90)『日本霊異聞』（日本古典文学大系本）356-359 頁
91) 場所は阪急神戸線の神崎川と園田の仲間ぐらいに位置し、猪名川沿いにある。
92) 奈良時代の僧。(668-749) 畿内を中心に諸国を巡り、民衆教化や造寺、池堤設置・橋梁架設等の社会事業を行い、行基菩薩と称された。
93) 椋橋（くらはし）総社のパンフレット
94)『東海道中膝栗毛』（日本古典文学大系本）215 頁
95)『孔雀楼筆紀』（日本古典文学大系本）282 頁
96) 著者不明「池沼淵井等の伝説比較」162 頁
97) 小泉清見（1931）、57-58 頁
98) 国学院大学民族文化研究会編、167-168 頁
99)『江戸と東京　風俗野史』275 頁
100) 井上頼寿、228 頁
101)『北窓瑣談』3 の 2（日本随筆大成本、318 頁）

参照文献

天野政之（1968）『趣味と実益の錦鯉』第 2 版、東京：加島書店
飯野頼治（1994）「秩父浦山に生きて」『あしなか』通巻 236 号、東京：山村民俗の会

池田廣司、北原保雄（1973）『狂言集の研究』東京：表現社
伊藤清司編訳（1981）『アジアの民話9　中国の民話』東京：大日本絵画
伊藤晴雨『江戸と東京　風俗野史』（宮尾興男編注　東京：国書刊行会　2001）
井上正一（1974）「奥丹後物語　草橋」『季刊民話』通巻1号、東京：一声社
井上頼寿（1968）『京都民俗誌』東洋文庫129、東京：平凡社
今越祐子、増田昭子（1982）「多摩の昔話」『常民文化研究』通巻6号、小田原：常民文化研究会
大塚　貢、柴田　操、安浪香里（1988）「口承文芸」『中京民俗』通巻25号、中京大学民俗学研究会
片桐民次（1948）「池の主」『高志路』通巻127新11号、新潟：新潟県民俗学会
加藤辰蔵（1940）「新津郷続怪奇談」『高志路』6巻3号／通巻63号、新潟：新潟県民俗学会
木下謙次郎（1950）『美味求真』、東京：酣燈社
木村他編（1946）『和漢薬名彙』東京：廣川書店
倉田正邦（1960）「伊勢・榊原の昔話」『民話』通巻24号、東京：未来社
黒木健夫（1972）『錦鯉』第5版、東京：西日本教育図書
_____（1975）『錦鯉』カラーブックス159、重版、大阪：保育社
小泉清見（1932）「長野県伝説集」『民俗学』4巻1号、東京：民俗学会
_____（1931）「長野県伝説集」『民俗学』3巻10号、東京：民俗学会
国学院大学民俗文化研究会編（1990）「世間話」『伝承文芸』通巻17号、東京：国学院大学民俗文学研究会
酒井卯作著（1958）『稲の祭』東京：岩崎書店
篠田鉱造（1997）『幕末明治　女百話』岩波書店
新谷尚紀（2001）「四季おりおり、端午の節句に鯉のぼりを揚げるのはなぜか」『朝日新聞』2001年5月4日
周　達生（1976）『中国食物誌　中国料理あれこれ』大阪：創元社
末広泰雄（1989）『魚の博物事典』東京：講談社
杉原美作（1979）「揖斐広瀬の伝説　坊主に化けた滝つぼの主」『美濃民俗』通巻147号、美濃民俗文化の会
鈴木堂三著（1977）『日本年中行事辞典』東京：角川書店
鈴木克美（1997）『江戸の金魚ブームを探る』東京：三一書房
高柳伸次（2000）「主大緋鯉の話」『茨城の民俗』通巻39号、茨城：茨城民俗学の会
竹村圧平（1983）「越山の狼と喜内さ」『伊那』31巻1号・通巻656号、飯田：伊那史学会
田中勝雄（1936）「山水に関する伝説」『旅と伝説』9巻11号、東京：三元社
淡水魚研究会著（1984）『佐久鯉の歴史』長野：淡水研究会
松井佳一（1974）『金魚』カラーブックス34、第2版、大阪：保育社

松林浄蓉（1999）「真宗寺院での庖丁式 伝えて700年絶えず」『中外日報』1999年6月5日
橋浦泰雄著（1966）『月ごとの祭』東京：岩崎美術社
花咲一男（1996）『江戸魚釣り百姿』東京：三樹書房
八切止夫（2003）『切腹論考』八切意外史11、東京：作品社
柳田國男（1963）『定本　柳田國男集』東京：筑摩書房
著者不明（1928）「池沼淵井等の伝説比較」『民族』3巻4号
Aarne, Antti（1973）, *The Types of the Folktale*, Indiana University Press
Cooper, Hayden, *European Carp Industry, July 18, 2002, in "The World Today"*, ABC Australia
Dorson, Richard M. ed（1975）, *Folktales told around the World*, The University of Chicago Press
Thompson, Stith（1993）, *Motif-Index of Folk-Literature*, Indiana University Press
Thompson, Stith and Jonas Balys（1958）, *The Oral Tales of India*, Greenwood Press
Werner, E.T. Chalmers（1924）, *Myths and Legends of China*, the Ballantyne Press
［古典及び漢籍］
大田南畝『一話一言』（『日本随筆大成　別巻』所収　東京：吉川弘文館　1978）
武井周作『魚鑑』（東京：有隣堂　1885）
上田秋成『雨月物語』（中村幸彦校注）（『日本古典文学大系56』所収　岩波書店　1959）
『宇治拾遺物語』（渡邊網也・西尾光一校注）（『日本古典文学大系27』岩波書店　1960）
横井也有『鶉衣』（麻生磯次校注）（『日本古典文学大系92』所収　岩波書店　1964）
柳沢淇園『雲萍雑志』（出版者不明　和装本　1704-1758）
『鎌倉三代記』（鶴見誠校注）（『日本古典文学大系52』所収　岩波書店　1959）
『鬮罪人』（小山弘志校注）（『日本古典文学大系43』所収　岩波書店　1961）
清田儋叟『孔雀楼筆記』（中村幸彦校注）（『日本古典文学大系96』所収　岩波書店　1965）
井原西鶴『好色一代男』（板坂元校注）（『日本古典文学大系47』所収　岩波書店　1957）
謝　肇『五雑俎』（大阪：前川源七郎　1822）
『今昔物語集』（山田俊雄他校注）（『日本古典文学大系26』岩波書店　1963）
井原西鶴『西鶴諸国ばなし』（井上敏幸校注）（『新日本古典文学大系76』所収　東京：岩波書店　1991）
『三人片輪』（子山弘志校注）（『日本古典文学大系43』所収　岩波書店　1961）
無住道暁『沙石集』（渡邊網也校注）（『日本古典文学大系85』岩波書店　1966）
菊岡沾凉『諸国里人談』（『日本随筆大成　第二期　24』所収　東京：吉川弘文館　1974）
『鱸庖丁』（小山弘志校注）（『日本古典文学大系42』所収　岩波書店　1960）
秋里離島『摂津名所図絵』（朝倉治彦他編『日本名所風俗図会』10巻所収　角川書店　1979）
平田篤胤『仙境異聞』（子安宣邦校注）（『仙境異聞　勝五郎再生記聞』岩波文庫版所収

東京：岩波書店　2000）
柳亭種彦『足薪翁記』（『日本随筆大成　第二期　14』所収 東京：吉川弘文館　1974）
曲亭種彦『其昔談』（『続燕石十種　第二巻』所収　東京：中央公論社　1980）
季　昉他編『太平廣記』（北京：人民文学出版者　1959）
近松門左衛門『丹波與作待の小屋節』（『日本古典文学大系 49』所収　岩波書店　1958）
藤原　某『塵塚物語』（影印版　大坂書林　出版年不明）
黒田五柳『釣客伝』（『続燕石十種　第一巻』所収　東京：中央公論社 1980）
兼好法師『徒然草』（西尾實校注）（『日本古典文学大系 30』所収　岩波書店　1957）
伊勢貞丈『貞丈雑記』（改訂増補　故実叢書編集部編　東京：明治図書　1993）
小原八三郎源良『桃洞遺筆』（阪本屋喜一郎 1833）
紀　貫之『土佐日記』（鈴木知太郎校注）（『日本古典文学大系 20』所収　岩波書店　1957）
秦滄浪著特墨僊編『一宵話』（『日本随筆大成　第一期　19』所収　東京：吉川弘文館　1976）
『風土記』（秋本古郎校注）（『日本古典文学大系 2』岩波書店　1958）
橘　春暉『北窓瑣談』（『日本随筆大成　第二期　15』所収　東京：吉川弘文館　1974）
十返舎一九『東海道中膝栗毛』（麻生磯次校注）（『日本古典文学大系 62』岩波書店　1958）
『二十四孝』（市古貞次校注）（『日本古典文学大系 38』所収 岩波書店　1958）
『日本書紀』（坂本太郎他校注）（『日本古典文学大系 67』岩波書店　1965）
景　　戒『日本霊異記』（遠藤嘉基・春日知男校注）（『日本古典文学大系 70』岩波書店　1967）
越谷吾山秀真編『物類称呼』（大阪：大坂屋平三郎　1775）
季　時珍『本草綱目』（上海：商務印書館　1954）
小野蘭山『重訂本草綱目啓蒙』（和泉屋善兵衛　岸和田邸學藏版　1858）
人見必大『本朝食鑑』（出版地・出版者不明　1695）
段　成式『酉陽雑俎』（京都：宣風坊書林　井上忠兵衛等　蔵版刊本　1697）
黄省曾撰『養魚経』（台北：藝文印書館　1967）
寺島良安『和漢三才図会』（東京：東京美術　1970）
源　　順『倭名類聚鈔』（正宗敦夫編纂校訂　複製版　東京：風間書房　1953）
［古典：現代語訳］
謝　　肇『五雑俎』（東洋文庫）（岩城秀夫訳注　東京：平凡社　1996）
井原西鶴『西鶴諸国ばなし』（宗成五十緒注訳）（『日本古典文学全集 67』所収　小学館　1996）
兼好法師『徒然草』（三木紀人訳注　東京：講談社　1989）
伊勢貞丈『貞丈雑記』（東洋文庫　446）（島田勇雄校注　東京：平凡社　1985）

越谷吾山編『物類称呼』（東条操校訂　東京：岩波書店　1941）
小野蘭山『本草綱目啓蒙』（東洋文庫　540）（東京：平凡社　1991）
人見必大『本朝食鑑』（東洋文庫　340）（島田勇雄訳注 東京：平凡社　1978）
段　成式『酉陽雑俎』（東洋文庫　382）（今村与志雄訳注　東京：平凡社　1980）
寺島良安『和漢三才図会』（東洋文庫　471）（島田勇雄他訳注　東京：平凡社 1987）
［辞典類］
下中直人編（2000）『歌舞伎事典』東京：平凡社
物集高見、物集高量共著（1916-1935）『廣文庫』東京：廣文庫刊行會
神宮司廳版（1985）『古事類苑』第5版、東京：吉川弘文館
J.C. クーパー著　岩崎完治他訳（1992）『世界シンボル辞典』東京：三省堂
石川弘義他編（1991）『大衆文化事典』東京：弘文堂
吉田　東編（1969）『日本地名大事典』増補版　vol. 2　富山房
乾克己他編（1986）『日本伝奇伝説大事典』角川書店
福田アジオ他編（2000）『日本民俗大辞典』東京：吉川弘文館
稲田浩二他編（1977）『日本昔話事典』東京：弘文堂
森末義彰他編（1971）『風俗辞典』第20版、東京：東京堂
平凡社編（1984-1991）『平凡社大百科事典』東京：平凡社
Jobes, Gertrude（1962）, *Dictionary of Mythology, Folklore and Symbols*, New York, The Scarecrow Press
［データベース］
国文学研究資料館『日本古典文学大系データベース』http://www.nijl.ac.jp/databases.html
国際日本文化研究センター『怪異・妖怪伝承データベース』http://www.nichibunn.ac.jp/youkaidb/

〈キーワード〉民俗学，日本文化，鯉の象徴性

Carp in Japanese Culture

Caroline BORRÉ

In Japan carp can be seen in many places, one of them being the ponds in sacred places like temples and shrines. This already suggests the special meaning of carp in Japanese culture. Carp seem to appear in very different aspects of Japanese culture. Not only are there *nishikigoi*, but there are also the *koinobori* or carp streamers. There also exist *houchou-shiki* ceremonies, during which a professional cook slices up a carp in front of a big crowd. There are a lot of other different traditions involving carp in Japan, but if we look at them together, we can distinguish three different types: the tradition of "eating carp", the tradition of "looking at carp" and the tradition of "believing in carp". After some general things about carp as a fish, these three traditions are explained in Chapters 2, 3 and 4.

It has been proven that carp were eaten even during the earliest Japanese civilizations. Moreover, when we look at written sources, it becomes clear that carp were considered to have some kind of magical powers and for that it was either forbidden to eat them, or they were eaten as medicine to obtain those powers. It can also be seen that when carp were being prepared, the preparation was often accompanied by pompous behavior, which also shows the specialty of carp as food. In any case, it is clear that carp weren't seen as common fish, but as special fish that could only be eaten on special occasions, or by special people (like the Emperor).

In Chapter 3, the tradition of "looking at carp" or carp as a decorative fish is discussed. In Japan, this custom is thought to be very old, the oldest written record being found in *Nihonshoki* (720AD). There it is written that emperor Keiko released some carp in a pond and enjoyed watching them in the early evening. Even though this is considered to be the earliest record of this custom, we don't find much about it after that. The famous *nishikigoi* didn't make an appearance until the beginning of the 19th century. Also, from this tradition it is clear that carp weren't seen as common fish, but were thought to be special, at least special

enough to keep in a pond and enjoy looking at.

The tradition of "believing in carp" can be found in old stories and legends, where carp play the role of some god-like fish with special powers. The most known story is the Chinese "*koi no takinobori*", in which is described how, from all other river fish, the carp is the only one that can swim up a waterfall, go under the dragon gate and transform into a dragon. Other stories talk about how a carp transforms into a woman or a monk. According to other stories, carp can also be reincarnations of people. Carp are often pictured together with *kami* and other supernatural beings. We can also see legends that talk of carp being messengers from the gods, and of shrines dedicated to these messengers. Sometimes they are some kind of gods themselves that can kill people. There are also some records of people killing carp like that and burying them on the temple grounds so it's spirit wouldn't try to take revenge. These carp graves can still be found in some shrines and temples all over Japan. Also from this third tradition and probably the most from this tradition, it becomes apparent that there used to be a belief in Japan that carp were some kind of supernatural beings with special powers.

Today carp aren't seen as special fish with special powers anymore. Somewhere on the way, this belief disappeared, but parts of it survived. Even nowadays there are people that still eat carp to cure certain diseases, the carp graves continue to exist and everybody knows the carp streamers on Children's Day. When we look at all of these remains, together with all the written sources, we can clearly see that the carp was not a common fish for the Japanese and most probably was considered to be some kind of god.